

## 令和7年度 第2回 静岡市総合教育会議 会議録 (委員等の発言の要点を箇条書きでまとめています)

日時:令和7年12月23日(火)  
13時30分～15時30分  
場所:静岡市役所静岡庁舎  
新館8階 市長公室

### 1 開会

#### 【難波市長挨拶】

- ・今年度の総合教育会議では、「不登校児童生徒」と、「幼保小接続」の2つのテーマについて協議している。
- ・前回の会議ではそれぞれの現状と課題、現在行っている取組みについて確認し、各委員の皆さまからご意見をいただいた。
- ・今回の会議では、前回頂いたご意見を踏まえ、今後の取組みについて協議していきたい。また、本日は今年度から静岡市教育政策アドバイザーに就任いただいた熊平美香様にご講演をいただく。大変参考になるご意見をいただけると思う為、その結果も踏まえて、様々な議論ができればと思っている。

#### 【中村教育長挨拶】

- ・前回の会議では、不登校児童生徒と幼保小接続について、現状と課題を整理し、各委員の皆様から多くのご意見をいただいた。不登校児童生徒の増加に伴う支援体制の構築や、幼児期から小学校への円滑な接続の重要性など、現場の実情や保護者の視点を踏まえた数多くの課題が明らかとなった。
- ・今日の会議では、それらの議論を踏まえ、今後どのような取り組みを進めていくべきか、その方向性について意見を深めていきたい。不登校児童生徒への支援については、すべての子どもたちが状況に応じて学びを継続できるよう、学校内外の支援についてご意見を伺いたい。幼保小接続の推進については、幼児期から小学校への架け橋期プログラムの作成や、保育者、教員、保護者の連携を通じて、子どもたちが安心して入学できる環境づくりや、成長段階に応じた支援の充実について議論したい。
- ・熊平先生から貴重なお話を伺えることを楽しみにしている。
- ・本日の会議が教育委員会と行政が一体となり、現場の声や子どもたちを取り巻く環境を踏まえた実効性のある取り組みの一助となることを願っている。

### 2 講演

静岡市教育政策アドバイザーの熊平美香様が、「すべての子どもたちのための教育とは」をテーマに、講演資料に基づき講演。

### 3 議題

#### テーマ1：不登校児童生徒への支援について

##### 【説明】

(学校教育課長)

- ・**資料1、別冊資料**により、第1回会議の振り返り、るべき姿、現状と課題、今後の方策、協議の視点等について説明

##### 【意見交換】

(井上委員)

- ・充実した不登校児童生徒への体制が整いつつあり、こどもたちそれぞれの状況に合わせた取り組みが充実していくのではないかと期待している。その中で、特に気になった2点についてお伝えしたい。
- ・1点目が、校内サポートルームの充実について、教育相談員の全校配置や、誰か相談に乗ってくれる体制が整った上で校内サポートルームの配置は、不登校児童の予防対策も含めて非常に重要だと考えている。
- ・直近の調査では、静岡市の不登校児童生徒数は過去最多だが、増加率は減少傾向、新規不登校児童生徒数も減少し、改善の兆しが見られる。校内サポートルームの配置やこれまでの取り組みが、少しずつ成果につながってきてているのではないかと感じる。
- ・私自身は定時制高校で校内居場所カフェを運営しており、そのカフェがあることで学校に来てくれる生徒もいる。小学校中学校の義務教育においても、教室に入れなくとも校内サポートルームがあることで学校で過ごす選択肢が増え、学びを保障する体制が構築できているのではないかと考える。校内サポートルームの充実は、ぜひ来年度重点的に取り組んでいただきたい。
- ・また、教育相談員は誰がどのように関わるのかが非常に重要なと考える。教育相談員の人員確保に加えて、ガイドラインや個別相談の話もあったが、「教える」というスタンスではなく、「ケアする」「寄り添う」「傾聴する」姿勢を大切に、相談員向け研修も含めた支援体制の充実を図っていただきたい。
- ・2点目は資料の状態（ウ）という話があったが、不登校児童生徒については、8月の第1回会議の時にそれぞれのセグメント毎不登校の状態を説明いただいた。30日以上欠席している生徒が約2000人いる状況で、学びの多様化学校、教育支援センターの充実、バーチャルスクール等の体制は素晴らしいが、対応できるのは200人くらい。支援が届く可能性があるのは10%程度の為、教育支援センターの充実や居場所づくりを取り入れてほしい。
- ・部活動の地域移行が進む中、学校や家庭以外の居場所の需要もさらに高まると思う。
- ・こども家庭庁に確認したところ、「地域子どもの生活支援強化事業」という制度があり、この補助率は国が2/3、市が1/3とのこと。こうした制度を活用し、不登校児童生徒を含む居場所づくりを進めていくことは大きな意義があるのでないかと考える。

(黒川委員)

- ・前回の会議から、一つ一つの取り組みが非常にまとまっている印象だと感じた。また、

校内サポートルームへの取り組みにかなり力を入れて進めようとしている感じた。

- ・校内サポートルームは、一つの校内での発信の場であり、教師、こどもたち、家庭をつなぐ大事な中心となる場になることを期待している。また、相談員の配置が充実する方向にあるのは良いことだと思う。
- ・校内サポートルームにおいてもう一つ大事なことは、物理的環境の整備だと考える。不登校児童の中には、発達特性により教室に居辛い子や、不安の強い子など、様々な心理的なサポートを必要とするこどもたちがいる。そういうこどもたちのために、パーテーションを設ける、あまり情報が一度に入ってこない環境を整えるなど、環境面の工夫も非常に重要。
- ・また、市内でも参考になるサポートルームを運営している学校がいくつかあり、そういう学校は自分たちの持っているものをやりくりしてサポートルームを作っていると聞いている。そこに予算を充てることが難しい現状もあるようだが、サポートルームの充実には、人だけでなく、整備的な面でもしっかり投資することが、将来的には望ましい。
- ・教育支援センターを充実させていくことで、ハブ的な機能を持たせることは心強い。学校が社会と切り離されるのではなく、学校も社会の一部であり、責任を持ってこどもを見ていく体制が必要。
- ・これまで学校だけでは支援が十分にできない現状があった。こどもを取り巻く環境は様々な施設や行政機関が関わっているため、一つの機関だけで全てを解決するのは難しい。さまざまな機関とどう連携していくかが、教育支援センターの円滑な運営となり、非常に重要なこと。
- ・個人情報の問題など課題も多く、教育委員会以外の各部門や民間との連携をどう進めていくのか、教育支援センター発信なのかは分からぬが、具体的な連携の枠組みを作っていくことで、理想でなく、きちんと実現できる形になると感じる。

#### (難波市長)

- ・今のお話で、資料の6ページの図を見ると、行政中心になっている印象を受けた。熊平先生の話では、家庭と地域が出ていたが、これは地域の視点が少なく、行政主導に見える。6ページの上から二行目に「学校外の様々なサービスやリソースも含めた社会全体でこどもの学びを支える体制を構築する」と書かれているが、社会全体の視点が見えにくい。各委員からご指摘があった点も含めて、今後考える余地があると感じた。

#### (永松委員)

- ・以前もお話ししたが、自分も2年半ほど、不登校児を持つ母として、悩んだ経験がある。
- ・今回の体制で、教育支援センターに繋がるというは非常に大きいと感じる。一方で、熊平先生が仰った、大人が変わらなければならない部分もあると感じている。
- ・不登校児が家にいると親も悩み続け、どうしたらこどもが学校に行ってくれるか分からず、毎日悩んで、学校と連絡を取り合う、その繰り返しになる。だんだん親も疲れてしまい、どこから手を付けていいか分からなくなってしまう。
- ・そんな時、受け止めてくれる方や相談できる方が近くにいることで、親も変われる可能性が

あると感じる。市長が仰ったように、社会全体で、親同士も繋がれる、話し合える場所が必要であり、親も過ごせる場所があることは大切だと感じた。

- ・また、企業人の立場から、そういうお子さんがいることを企業側も理解し、受け入れていく必要があると思う。こうした情報は企業の皆さんにも伝えていくべきだと感じた。

(佐野委員)

- ・教育相談員は必須であり、サポートルームも充実させていくべき。その中で、利用者にとって使いやすいものであること、いわゆる消費者目線も大切。
- ・ある幼稚園では未就園児を遊ばせている間に、未就園児の保護者の悩みを聞き入れてアドバイスする取り組みがある。こうした保護者の視点を含めた支援や使いやすさが重要。
- ・制度を作っても知られていなければ意味がなく、市の姿勢として訴えることも大切。保護者、消費者の視点とそれを広報して、実益のあるものにすることが重要だと感じた。
- ・教育支援センターは多機能になるので、さらに使いやすく、分かりやすい運用が求められる。

(松村委員)

- ・社会的構成ではある程度の姿が見えてきており、静岡市として一生懸命取り組んでいると感じる。ただ、根本的な問題として、不登校生徒の対応は教員の仕事だと思う。組織の仕事ではなく、教員が一人で悩み、どうしようもない時に組織に頼るもの。
- ・また、子どもの育った環境や親が大きく影響している。そうした背景を読み取る力を教員が持つことが重要。
- ・一番必要なのは教員の訓練。体験からしか答えは出でこない為、多くの体験を重ねてその都度、最善の答えを出すことが大切。100%の答えでなくても、何年か後に良い答えが見つかることもある。
- ・以前、教育委員会の定例会後に、教員への働きかけができているか教育長にお願いしたことがある。特に校長先生には、人間としての深みを勉強してほしい。
- ・自分は、年齢を重ねて自分のものの考え方がある程度できているが、それが古いと指摘されることもある。教育の本質の部分は、「時を守り、場を清め、礼を正す」の三点。なぜ時を守るかというと、相手の時間を奪ってしまうから。相手に迷惑をかけてはいけないという意識が大切。礼を正すのは、相手の考え方を尊重し、自分と違う考え方の良さを感じ取ること。これは今、大谷翔平選手が実践していることでもあり、とても勉強になると思う。
- ・ここ数十年、こうした日本の美や精神的な文化をきちんと教えてこなかった学校があると思う。そのため、若い先生が社会的に人ととの間（ま）を読み取る力が少なくなっていると感じる。現実に、不登校の子だけでなく、子どもとトラブルを起こすのは教員であり、本来、担任や教科担当、部活動の先生がその役割を担っている。
- ・また、子どもたち同士でのトラブルも、教員が間に入れば収まることが多いが、保護者が介入すると複雑になることもある。親同士が話し合える場を設けることも一つの方法だと思う。
- ・現実の問題と、頭の中で考えた社会的な構造は大きなズレがある。そのことに教員が気づくことが大切。この問題は非常に根が深いものであり、正答はないが、今できる範囲で一生懸

命取り組むことが大切。

- ・市長が会見をする時、的確に素早く回答を出すが、それは自分自身で資料も作成しているからだと思い、そうした自分の信念が見えることが教育の世界には必要だと私は思う。
- ・教える立場の先生が、親に対してもこどもに対しても、自分の教示を示す力が必要。それに苦労もあり、一生懸命やっても報われないことも多々ある。
- ・静岡市として様々な意見を考えて、少しずつ前進していることを本当に心から感じている。
- ・新通小学校で不登校児童生徒のための学びの多様化学校を作るということで、とても素晴らしい。
- ・強さと優しさの両方を持った人、そういう教員を目指さなければいけないと思う。結局、人を育てるにしても納得させるにしても、最終的には情が大事。情がすべての解決策を担うことになる。

(中村教育長)

- ・熊平先生の話の最初に「リフレクションと対話」という言葉があり、これをまず大人が身につけなければならないと感じた。
- ・現在、静岡市の先生方の中には、ベテラン、中堅、若手と様々な経験を持った方がいる。ベテランの先生方の中にも、リフレクション、つまり自分の授業やこどもとの関わりを失敗してもいいので、失敗しながら振り返って次に活かすという意識がもう少し必要だと感じた。忙しさもあるが、そういうことにも意識を向けていただきたい。
- ・若手であってもベテランであっても同じで、教員という職業は本当に待ったなしの状況。こどもが困っている時に、どう声をかけられるかが大切。そこからどんな支援につなげていくかということが重要。
- ・経験に基づくものと、周囲と協力しながら進めていくチームとして支えていくことが、これから教員に求められること。若手の先生が離職しているという現況を踏まえると、ベテランの先生の経験を活かしながら、若手の先生をサポートし、自分自身も成長することが大切。どんな制度を作っても、それはすべての根幹に共通する部分だと思っている。
- ・こういった今見ていただいたような状況に対して、その部分をしっかりとと考えながら、教育委員会だけでなく、市と民間と協力して取り組んでいきたい。

(難波市長)

- ・不登校児童生徒についてまとめていただいたが、やはり支援や対応のあり方を俯瞰的に見ることが大切。それを踏まえて、自分がどうあるべきかを考えることが重要。
- ・今日は結論を出す場ではない為、基本的な考え方について整理したが、これからも変革を進めていくべきだと思う。今後、どのような変化が現れるかを考えていきたい。

## テーマ2：幼保小接続の推進について

【説明】

(幼児教育・保育支援課長)

- ・資料2、別紙1、別紙2により、第1回総合教育会議の振り返り、あるべき姿、課題、

## 今後の取り組み方針、協議の視点等について説明

### 【意見交換】

(佐野委員)

- ・幼保小接続ガイドライン、架け橋期カリキュラムがしっかりと作成されていくことで、こういったガイドラインが確立されることは先生方にとっても良いことだと思う。これをいかに活用していくかが最も重要であり、市民の皆さんにご理解いただくことが大切。
- ・熊平先生の話で、小学校一年生が入学する際に直面する6つの変化というのが、非常に勉強になった。それを前提としてどのように繋げていくかを考える必要があると思う。
- ・個々の対応が必要な場合と、一般的に「小一ギャップ」と呼ばれる悩みを抱える小学1年生では、対応が異なると感じる。様々な要素が含まれているので、その点を整理して考えていくことが重要。個々に課題を抱える子どもたちは、家庭の事情など多様な背景があり、個別対応が求められる場合があり、不登校に共通する部分もあると思う。
- ・一般的な小一ギャップを抱える子どもへの対応には、先ほどの6つの変化を前提とした考え方方が必要だと感じた。
- ・幼稚園に通っていない子どもが幼稚園に入る時に、子育て広場などで、保護者と園の先生方が話す機会が多く設けられている。こういった交流の場は情報交換の場でもあり、幼稚園と小学校でも同様の機会が設けられると良いのではないかと感じる。まさに、保護者のニーズを汲み取る作業でもあるので、今後こうした取り組みを進めていければと良いと思う。

(井上委員)

- ・幼保小連携についても来年度以降、充実した取り組みを考えていることが、把握できた。
- ・課題の2で示していただいている、発達が気になるお子さんが現場でも多く見られる状況だと思う。担任の先生との関係や、学習・生活が安定するために、環境や関わり方を工夫することが重要だと考えている。
- ・保護者が不安を抱えたり、園や小学校で十分な理解が受けられなかったりすることで、困難を感じるケースも多いと聞いている。
- ・資料4ページでは1歳半検診の重要性が示されているが、そこで分かるのは、主に知的障害や重度の自閉症等と聞いており、来年度以降5歳児検診を取り組むことは重要だと思う。その中でも特に、結果としてこの子に特性があるといった結果だけでなく、保護者と園がその子を理解し、どのような環境や支援が有効だったかを整理することが必要だと思う。
- ・小学校で求められているのは、この生徒は支援が必要だという情報だけでなく、どんな配慮や関わり方で安心して過ごせたかという具体的な支援の情報。それを幼稚園や保育園の段階から、スクールソーシャルワーカーを含めた専門職が丁寧にデータをつなげていくことが不登校を未然に防ぐことにも繋がり、極めて重要だと思う。
- ・熊平先生の「感情は変わる」というお話が非常に重要だと感じた。発達の課題だけでなく、自分の気持ちを正しく理解し、伝える力、ノンバーバルコミュニケーションなど、自分の感情の扱い方についても今後力を入れて取り組む必要があると感じた。

(黒川委員)

- ・前回の会議から目標などが明確になり、課題も整理されてきたと思う。
- ・特別な支援が必要な子どもたちも、学校に入ってから適応が難しい場合があり、支援学級に所属する子が増えている。
- ・以前、園で就学前のお子さんを対象にした専門調査の仕事に携わったことがあり、園の先生から課題を持つ子どもの話や、小学校入学への不安を抱える保護者の相談を受ける場面があった。園から小学校への移行に課題を感じることもあり、お子さんが小さいため保護者の気持ちに寄り添いながら課題と一緒に考えていくことは、専門的な関わりが必要だと思う。また知識だけでなく、心に寄り添うことが重要。
- ・今回の5歳児検診が、今後全園に展開されれば、未然に保護者の不安に寄り添うことができるのではないかと感じる。
- ・以前とは環境が大きく変わり、少子化や社会の変化の中で、親が相談できる相手がいないケースも増えている。小学校に入ってから、初めて子どもが以前から困っていたことや、もっと準備すれば良かったと気付く保護者も多いと思う。そのため、社会の変化に応じて私たちも子育て支援を幼保小接続の視点から考えていく必要があると感じた。
- ・園が保護者とどのように関わっていくか、保護者自身が抱える課題も様々。シングルマザーで大変な思いをされている方もいるので、そういった面からもサポートできれば良い。
- ・支援はお子さんだけでなく、学校への移行を手助けすることにもつながると感じる。
- ・ただ、幼稚園や保育園と小学校の役割は異なるため、学校に適応させる子を育てるだけでなく、園で心の成長を育み、小学校で社会の中で生きる力を育むことへ上手く移行させることが重要。
- ・資料にある公開授業や合同研修会などの場で、教育の根本にある信念や目指すものは異なっていても、目標は同じだということを共有できる機会が増えれば、連携もより深まるのではないかと思う。

(難波市長)

- ・内容をまとめる際、アウトプット型とアウトカム型があるが、行政が何かをするというのがアウトプット型で、もう一つアウトカム型として、市民や社会にどのような良いことがもたらされるかという視点が重要。
- ・この資料を見ていると、アウトプット型が多く、行政が主導するものになっている印象。保護者、家庭にとってどんな良いことがあるのか、あるいは自分たちは何をしたらしいのかという点が少し分かりにくいのではないかと思う。
- ・熊平先生の資料は、親が見ると「なるほど、そういうことか」と新たな気付きがあると感じられる。だから、そういった内容を踏まえた資料作りが大切。こちらの資料は親に伝わるメッセージが少ないように感じる。
- ・一歳半検診についても、例えば一歳半検診の際、難聴の傾向がある場合、親に伝えても放置されてしまうことがよくある。それは、親がその情報を受け止めきれず、どうしたらよいか

分からない状態になっているためと考えられる。

- ・なぜ一歳半検診が必要なのか、親自身が理解できるような説明が必要。また、幼保小の接続についても、なぜそれが重要なのか、親が「なるほど」と思えるような説明があれば、自分自身も変わろうと思えるのではないか。

(中村教育長)

- ・難波市長の話を伺い、教育も制度や体制を作る際、保護者がどんなことがあるのかという視点をもっと取り入れる必要があると感じた。
- ・共通して委員の皆様からいただいた意見も多く、保護者が内容をどのように受け止め、そしてどのように支援していくか、こどもたちへの支援は保護者への支援でもあるという点を、今後さらに考えていかなければならないと思う。
- ・5歳児検診の話もあったが、小一の不登校児童が増えているという状況は、静岡市のみならず全国的に見られる。そういう状況を踏まえて、できるだけ早く状況を把握し、結論を出すだけでなく、そこから具体的な支援につなげていく視点が重要。
- ・熊平先生の話の中で、不登校のこどもたちの声の中に「家のことを相談したい」という意見があった。そうした声をしっかり受け止めて、考えていくことが必要だと感じた。
- ・こどもたちの中には家庭での居辛さを抱えている子供がいる現状がある。「感情にどう向き合うか」「感情をどう扱うか」は、今後この市が目指す方向性だと思う。
- ・大人は、こどもが感情的になっていると、「そんなこと言ってはダメ」「授業に行かなきゃいけないでしょ」と正しさを求めがちだが、まずはその感情を受け止めることが大切。悪いことではないので、周りの大人がどう受け止めてあげるかが大切。先生方にもそういう姿勢を望む。

(熊平教育政策アドバイザー)

- ・活発なご意見が多く、具体的な話もたくさん出ており、素晴らしい会議だったと思う。準備する側の姿を裏でみていたので、その成果が皆さんに評価していただけたことを嬉しく思う。
- ・皆さんのがそれぞれの立場でこどもたちのために考え、動いてくださっていることに感謝したい。課題は多いが、みんなで力を合わせて進めていければと思う。
- ・保護者の声や地域の話、企業に対する理解も非常に重要だと思っている。どんなに良い教育改革でも必ず批判が出る。新しいことを始めれば、本来大切なことが漏れがちになることも、教育改革にはつきもの。いかに地域の人たちが大切なことを共有できるかが、良いことを実現するための勝負だと思う。私自身も社会側の立場なので、できることがあれば一緒にしたい。

(松村委員)

- ・特に幼保小接続というのは、地域の雰囲気もあると思う。学校という組織だけを考えると、形だけ整っても、本当の意味で育っているかどうかは、地域がどれだけ協力できるかが重要。
- ・先日の教育委員会の定例会の話にもあったが、私の地元は浅草、人形町で、商売をしている人が多い。親が働いている間は、子どもを預けている。その子たちは毎日散歩の時間があり、先生が乳母車に乗せて、地域のおじさんおばさんの家を回る。その家で「かわいいね」と声をかけられる、まさに教育の継続である。

- ・地域性によっては難しい部分もあるかもしれないが、コミュニティスクールとして社会の材料を取り入れることも行われている。しかし、実際は教育の観点で考えるのは難しく、教員が果たす役割は大きいと感じる。
- ・教員を育てるのことと、いかに社会の知恵を取り入れることは難しいが、重要な考え方だと思う。

(永松委員)

- ・自分自身も親として、子どもを自立させることが目標だと考えている。親はどうしてもいろいろと手を出してしまうが、先生も同じかもしれない。
- ・子どもに自分で選択させることが主体性につながると思う。今回は改めて自分も考えさせられた。

### 3 閉会

以上をもって、令和7年度第2回静岡市総合教育会議を閉会する。